

神崎與五郎（松口月城）

怯と 呼び 痴と 呼ぶは 人の 呼ぶに 任す

満身の 忠節 誰か 吾を 知る

大望 前に在り 恥 忍ぶ 可し

慇懃 文を 草して 馬夫に 謝す

解説 新吉良邸を探るため扇子売りの商人やら、米屋五兵衛こと前原伊助と合流して小豆屋善兵衛と称して吉良邸のある本所近くで開業した神崎与五郎は江戸へ下向した時の有名な逸話がある。道中に丑五郎というヤクザ者の馬子が、馬に乗れとからんできたが、神崎が断ると、腰抜け侍と調子に乗った丑五郎が詫言証文を書けと無茶苦茶を言ってきた。神崎はここで騒ぎになるわけにはいかないとおとなしくその証文を書く。これを見た丑五郎は笑って立ち去った。その後、赤穂浪士の討ち入りがあり、そのなかに神崎がいたことを知った丑五郎は己を恥じて出家の上、神崎を弔ったという話である。人柄は豪放磊落と繊細さを兼ね備えた人で酒斗なを辞さずの酒好き。

語釈 ※怯||おそれ驚くこと。おびえること。 ※痴||愚かなこと。 ※大望||大きな望み。遠大な志。ここでは討ち入りのこと。 ※慇懃||礼儀正しく丁寧なこと。 ※草||下書き。草案。 ※馬夫||馬方

通釈 豪放磊落な性格と無類の酒好きなので人は怯と呼び痴と呼ぶが、どう呼ばれようと人に任せる。自分は主君につくす節義を持つ事は誰が知るところか。大望を前にしたこの時、馬夫に恥をかかされても我慢し、言いなりに証文を書いたのは、自身のみぞ知るところである。